

## 「保育教職実践演習（幼稚園）」の

## 授業報告

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 山田 美香

本報告は人文社会学部心理教育学科で四年後期に実施している「保育教職実践演習（幼稚園）」の授業報告である。心理教育学科では幼稚園教諭・保育士を養成しており、本授業を履修することでどちらの免許資格も得ることができカリキュラムとなっている。

関連する先行研究としては、勤務校での教職実践演習の授業状況や学生アンケートの結果を論じたものが大変多い。そのため本報告は教職実践演習に関する研究としては新しい研究とは言えないが、今後本学の幼稚園教諭・保育士課程の在り方を議論するためのデータとしてまとめた。授業最終回、学生は文科省が「教職実践演習」を行う上で重視する「四つの事項」についてグループ発表を行い、さらに本アンケートに答えることで幼稚園教諭・保育士を目指す意義を考えるきっかけになったと思われる。文科省が「教職実践演習」

で身につけるべき「四つの事項」とは、幼稚園教職課程の場合、「一、使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」「二、社会性や対人関係能力に関する事項」「三、幼児理解や学級経営等に関する事項」「四、領域・保育内容等の指導力に関する事項」といえる。

アンケート開始前に、今後本学の幼稚園教諭・保育士課程の授業を行う上で示唆を得るために本授業報告でアンケート結果を引用することを説明した。その結果、授業を受講する学生一四人のうち一三人から回答を得ることができた。

教職実践演習に関する四つの事項について、「大学で学んだこと」「十分学べなかったこと」「就職後に必要だと感じることをそれぞれ先生の言葉で書いてもらった。

以下、四つの事項に関して学生が答えた内容をそのまま引用しつつ述べることにする。

### 一、使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項

（大学で学んだこと）

大学で学んだ「使命感」「責任感」については、「子どもの命を預かり育てる」「園での安全管理」を強調する学生が多かった。子どもは命ある大事な存在であるため、少しのケガでも責任をもって園で情報共有し保護者へ伝達することについて学生の意識は大変高かった。

具体的な子どもとの関わりという点では、「子どもの発達段階や状況に応じて発達を促すような働きかけや援助をする必要がある」という意見もあった。学生は授業などで子どもとの発達段階を学んだことから、子どもにとって必要な援助とは何かを理解する努力をしていた。

子どもの育ちに対しては、「『教育的』愛情として、ただかわいがるのではなく育ちを促進できるように愛をもって接する」「園全体で子どもを見守るという責任感を親へと伝えていくことで良い関係を築ける」と、自らの「使命感」「責任感」「教育的愛情」は園全体・保護者との関係で作るものであると考えていた。

また、保育は「使命感」「責任感」がなければ行っていくことができないもの

である。しかし保育者が率先して保育し子どもにその結果を求めめるのではなく、子どもは自ら遊ぶことで成長していくものである。そのような保育観を持つ学生は、子どもへの働きかけや援助について「『ただ遊ぶ』というわけではなく、子どもたちの発達段階に応じて、活動に取り入れたい、その子と関わることが保育士の仕事であるということ。先生は『教える人』ではなく、共に学び合う存在であるということ」という意識を持っていた。同時に「子どもを遊ばせるのではなく一緒に楽しむことが大切だということも学びました」というように、学生が子どもとの「楽しむ」関係性を重視した点は興味深いと思われる。

### （十分学べなかったこと）

大学で十分に学べなかった点についても学生は自覚的に説明している。「子どもの命を預かり育てていくうえで、子どもひとりひとりにあった対応を考える力（発達に関することや障がい児教育に関すること）が十分に養われていないように感じる」と述べる学生がいた。「子どもの命を預かり育てていく」という言葉は理解できても成長する子どもと直接関わるなかで、子どもの多様性を重視するというのはどうということ

なのか、自分なりに考えざるを得ないという点が書かれていた。

これに関連して他の学生は「だからこそその責任を果たすためにどんな力を身につけていく必要があるのかという部分が重要だと思うが、その力は十分身につけられなかった。」と述べている。

現段階では実際に子どもと関わることが少ないため、「どちらかというところ、抽象的な部分は多く学んだが、『子どもの主体性』って、具体的にどういうこと？というように言葉の意味などをもっと深く話し合ってみたかった」という声も聞かれた。大学では保育における「子どもの主体性」の重要性を学ぶが、子どもの主体性に依った保育とは具体的に何を指すのか、その具体的などころは明確ではないのであろう。この点は学生の切なる問題だと理解できる。

保育者の「教育的愛情」については、「あまり学べなかったかなと思う。ただ甘やかしてかわいがるだけではなく、時には厳しく接することもある必要だと思うが、その見極めが難しいと思う」と、子どもの主体性を大事にしつつ「指導」「援助」も行うバランスが分からないと書いている。保育は子どもの姿を見るなかで子どもに必要なことを伝え、それ以外は子どもの主体性に任せるのが良

いと思われるが、子ども理解が進んでいないと「教育的愛情」をどのように注ぐべきか難しいと思えるものらしい。

このほか、「子どもの安全配慮の方法」「いざこざの対応」も具体的にどうしたらいいのか理解できないままであることも挙げられた。

### （就職後に必要だと感じること）

就職後に「使命感」「責任感」「教育的愛情」を持った保育者になることについて、「十分学べなかったことを就職後、経験を積んでいくことが必要だと思う。また、実習や授業を通して実践することができなかった保護者に子どもの様子を伝えるという責任の果たし方を学ぶ必要があると思う」と、学生であるため実際の現場で「経験を積む」ことで理解できるが増えるとも考えていた。

学生の多くは子どもに関する知識は多いが、「子どもの発達段階についてより詳しく知ること。子どもの発達を促すような援助方法、経験、子どもの安全を守ること」と知識に基づき子どもの発達を尊重する援助の在り方を学んでいくことの必要性を理解していた。自らの仕事が生子どもを対象とするものであるため、子どもを中心にした「良い園」となる

ことに貢献したいと思っっている様子も分かる。「子どもを相手にする『仕事』であることを忘れない。園長でも他クラスの担任でも、一人ひとりを大切にしているのが良い園。自分の得意なことなど何でもクラブ活動として生かしてコミュニケーションを図る」と、自分がその園で必要とされるように努力したいという気持ちを持っていった。

ほかに、多様な保育者から学ぶ姿勢を持ち、「現場で、例えば『子どもの主体性』を尊重する、というのはどう実践されているのかなど、実践について。色んな保育者の話を聞いて、どんな使命感・愛情を持って普段接しているのか」を知りたいと考える者もいた。

つまり園において自分の保育者としての価値観をどのように保育に体現していくのかについて関心を持つ者が多かった。

## 二．社会性や対人関係能力に 関する事項

（大学で学んだこと）

保育者は、子どもや園内外の「対人関係」と関わり続ける「社会性」を持つことが必要である。子どもとの関係性で言えば、学生のなかには「先生は子どものお手本であるべき

だが、子どもの主体性を用いた（ママ）上で、子どもと学び合いながら礼儀などの面ではお手本であること。また、組織の一員であるため、一人でやるのではなく、保育者同士で協力し、全体で園の子を育てていく意識を持つ」と、「子どもの手本」となるため人間として「社会性」を持つ必要や、職員として子どもや他職員に与える影響を考える者がいた。

保育者として子どもを育てる責任を理解し、そのために保護者・地域を重視した保育こそ子どもを育てるといふ意見がみられた。「他の先生と協力し皆で子どもを見ることで、担任だけでは気づけなかったことも見えてくる。他の先生のアドバイスによってより良い保育を行うこともできるため、職員間のコミュニケーションも大切。さらに、保護者や地域の人もいっしょに子どもを育てていく姿勢も大切である」というものである。

このことから学生は、「社会性」や「対人関係能力」を持った保育者であればなおさら保育の質を高めることができる」と述べている。保育者は、保護者・地域を含めた多様な人との人間関係をもとに子どもが成長していくうえでプラスに働くものを与えられると考えていた。

（十分学べなかったこと）

「対人関係」は学生が就職後に一番不安に思うところである。学生は特に保護者との「対人関係」に関心を持っていった。しかし学生の段階では実際の保護者対応を学ぶことができないため、「保育者として、対人との関わり方（保護者対応等）は十分に学べたとは思えない。実践するにあたって、同じ学生どうしでロールプレイング程度の経験しかないため、なかなか活かすことはできないように思う」と、授業で行うだけでは今後具体的な対応を行うことは難しいという意識が強かった。来年度から園で勤務する上で「新人としての立ちふるまいと、トラブルになった時の解決法」を学びたいと書いた学生もいた。

学生は保育者を目指すなかで、園の様子がある程度知っているとはいえ、実際の園がどのように関係者と細かな連携をしているかまでは知ることができない。学生は「対人関係」そのものを重要だと思っっているのではなく、どのように保育の質を高めることができるのか、それに必要な「対人関係」の在り方に関心を持っていった。次の学生の言葉からも理解できる。

「他の先生や保護者、地域の人と

の協力が大切なことは分かったが、その為にどんな工夫が実際の保育現場で行われているのかは断片的にしかわからぬ。例えばミーティングが行われているという事実だけでなく実際の雰囲気がわかると、どんな風にコミュニケーションをとっていかると保育をより良くしていけるのかイメージができたと思う。」

### （就職後に必要だと感じること）

学生は、就職して保育者になるとは園内の保育者や保護者・地域の人と共に学んでいくことであり、それが同時に自分自身の能力を高めることになるかと前向きに理解していた。「子どもと学び、成長し合うための保育者の知識量や柔軟さを身につけていくべきだ」という姿勢を持ち、また「笑顔で挨拶すること（どんな時でも）。自分の意志をしっかり持ったうえで、他の職員や保護者の意見を参考にする力」を必要だと感じていた。

そのような能力を身に付けるため、園では「保護者や地域の人ともコミュニケーションをしっかりとって子どものことを共有し、互いの思いを伝えあい理解すること」「保育者間での連携（そのために保育者間でのコミュニケーション）。他機関との連携。保育者として保護者同士の

関係を円滑にすること。保護者に寄り添う姿勢」を重視する様子がうかがえた。

ここから分かるのは、就職後、学生は、園内の保育者・保護者・地域の人との関係のなかで学び成長したいという気持ちを持っていることである。

### 三、幼児理解や学級経営等に 関する事項

#### （大学で学んだこと）

大学の学生は授業に対して前向きな者が多い。そのため「幼児理解」「学級経営」については、「子どもの発達過程については一通り学んだ。実習の中の部分実習や責任実習でクラスを動かすことの一部分は学ぶことができたと思う」と、幼稚園・保育士課程で学んだことに自信を持っている。

しかし、「保育・学級経営を行う上で、子どもの特性や発達、興味関心などをよく理解して、それに沿った活動を行っていくことが大切。またクラス内には外国語や障害のある子どもなど、いろいろな子がいるが、そういう子どもも含めた全員が楽しく園生活を送れるように配慮する必要がある」と、現場では障害を持つ子どもや外国籍の子どもへの対応を考え

た上での学級経営が必要であると考えていた。

どのように学級経営をしていくのかについて、「子どもそれぞれ、似ていてもちがった事情を抱えている。親と一緒に頑張ろうという気持ちを伝え、園、保護者、地域で子どもを育てていく。幼稚園においては小学校への接続を考えてまとまりのあるクラスをつくる必要がある。集団行動に慣れる必要」と、小学校進学を前提とする集団行動を中心とした幼児教育も必要とされることを書いている。

ただし集団行動を行ううえで、「一人ひとりの話をしっかりと聞いて、一対一の時間を作ることの大切さを学びました。クラスを一つとして見るのではなく、クラスの中の子ども一人ひとりを見て接し方を変えることも時には必要であることを学びました」と、保育者は集団行動における子どもの存在だけでなく、子ども一人ひとりを大事にすることが必要だとよく理解していた。

#### （十分学べなかつたこと）

学生が「学級経営」について学べなかつた点は、「年単位での学級経営についてはなかなか学べていないと感じる。また子どもの発達過程について学んだが身に付けられなかったとは

思えないので学びが不十分だったと思う」と、学生であるゆえに学級経営の十分な経験がないことから来年度保育者になることを考えると不安に思う者もいた。

「学級経営」に関わり、「障害について」「より深く学ぶべきだと感じた。また外国籍の子に関しては全く学んでこなかった為学びたいと思った」と、一人一人の子どもへの対応を行うにはまだ十分な力が身につけていないと考えていた。

それは「子どもをあらゆることを含めて受け止める」ことが保育者の仕事であることは分かるものの、どのように子どもを受け止めるべきなのか、それが難しいという本音もあった。「子どもを一言で『受け止める』と言っても『どう受け止めるのか？』がまだよく分かっていない」というように、学級経営を行うにつつ子ども一人一人を大事にすることが要求されることがどんな実践を行うことになるのか分からないようであった。

「学級経営」における保育の方法も、「見学に行った園が自由保育だったため、先生の一人一人の子どもとの関わりはよくわかったが、クラスとしての関わりはあまり見ることができなかつたので、学級経営については十分には学べなかつたと思う」

と、これまで自分が勉強した保育と今後就職する園で必要とされる保育との違いが、就職後に保育を行う上で課題になると考えていた。

#### （就職後に必要だと感じること）

「幼児理解」「学級経営」について就職後に必要であるのは「年間を通して、子どもをどう成長させていきたいか、発達や要領と照らし合わせて学級の運営を考えていく力が必要だと思う」と書いている。そのため、「子ども一人一人のことをよく見てどんなことに興味があるのか、どんな援助配慮が必要なのかを理解することや、全員の気持ちを受け止めて皆が楽しめるクラス作りをしていくことが必要」だと、すべての子どもが楽しめる学級経営が子どもの成長に重要だと考えていた。

また成長のプロセスにある「幼児を理解」し「学級経営」を行うために、保育者として「その場だけにならない、次や将来を見据えた関わり親と良い関係を築き、伝えるべきことを伝えられる力。小学校への接続、連携を考え、様々な場を活用する力を身につけたい」と述べている。就職後は、子どもの次の成長につながるような「学級経営」に力を発揮することが必要であると考えていた。

しかし多くの学生にとって一番重

要なのは「一人一人の子どもと同じように向き合うこと。一対一じゃないから、対応の差には偏りができてしまうけど、限られた時間で子どものことをどれだけ知ろうとするか」ということであり、子どもを知ろうという気持ちがあれば「幼児理解」「学級経営」ができるということであった。

ここから、「幼児理解」「学級経営」について、一人一人の子どもを尊重し、「学級経営」に必要な力を身につけたいという学生の気持ちがよく分かる。

#### 四．領域・保育内容等の指導力に関する事項

##### （大学で学んだこと）

大学では授業で「五領域」や「保育内容」の指導や援助について学んでいる。学生は、「保育の五領域やどのような指導がいいのかは学び、また実習において指導の実践をすることができた」と、授業や実習で学んだことには満足する者も多かった。また授業や実習から、学生は子どもに対して「指導」よりも「援助」が重要だと考えていた。

「保育内容」については「子どもの興味関心をふまえながらカリキュラムを組み、興味を広げられるよう

な働きかけをすることが大切。子どもの声を拾い、子どもを中心とした活動運営をしていく必要がある」と、子どもの状況をもとに何をカリキュラム化していくのかを判断すること、それこそが子どもの成長に必要な「保育内容」を考えることだと理解していた。「カリキュラムはある程度なくてはまとまりがつかないが、子どもが何をやりたいか主体性を尊重することが子どもの成長につながる可能性を秘めている」と、子どもを尊重することが子どもの成長にはプラスに働く保育となると考えていることが分かる。

また、「制作に必要な技術（説明や準備の仕方）や知識（〇歳ではさみが使えるようになるなど）、環境構成の大切さ」という個別の知識が実際の保育現場では役に立つという声もあった。

#### （十分学べなかったこと）

カリキュラムがある保育とカリキュラムがない園を見学することで、「カリキュラムがある園、ない園の両者を見学することで、また考えが広がるのではないかと思った」と、子どもの主体性を重んじる保育者の子どもへの関わりには考えさせられるところがあったようである。しかし、学生が他の「事項」でも書いて

いるように、「子ども中心で指導していくことが大切なのはわかったが、そのために保育者がどんな風に働きかけると子どもの主体的な活動が引き出せるのかという部分が十分には学べなかったと思う」と、「子どもの主体性」の意味を理解し、保育者として何をすることがよいのか分からないという意見もあった。

カリキュラムがある園についても、大学の授業だけでは時間的制約もあることから、「どういう風に日々の日案や週案を基に運営を行っていくべきかあまり学べなかった。一回切り（ママ）ではなく年間を通して子どもにも働きかけるか」という意見もあった。

また、子どもの主体性と保育者の「指導力」「援助する力」について、「子どもは遊ぶことから学んでいく」と考える学生からすると「遊ぶことを中心に考えてきたため『指導』という面で理解力・対応力が前に準備する対応力。教科内容を応用する表現力』が必要だと考えているようである。子どもの遊びや活動に対して、どこまで『指導』『援助』が必要なのかその感覚が分からないというのは、学生ならではの思いかもしれない。

一方で園は保育を行う場であるこ

とから、保育者として子どもの姿を理解し今後の子どもの成長につなげることが重要であると書いている者もいた。実践の場面では「記録の書き方や内容。ピアノや弾き歌いの技術」を理解し、子どもに楽しんでもらうために「手遊び、わらべうた」などもマスターしたいという意見は多くみられた。

#### （就職後に必要だと感じること）

保育者として子どもと関わるうえでの「指導力」「援助する力」として、学生は「その場その場にあった子どもへの対応を考える応用力」「子どもの興味関心を理解して、子どもがやりたいことを見つけて主体的に活動に取り組めるような援助をしていく力」を挙げている。

保育者としての能力を絶えず高めるために、「手あそびやあそびの知識、ひきだしを増やし、日々事前準備をしなくても空き時間ができたりした場合、すぐに何かできるような身につけていくべきである」と書いている。そのためにも「自分から学びにいこうとする意欲や勤勉さ」「研修会等への参加。情報収集・学ぶ姿勢」も必要だと捉えている。

これらのことから、学生は子どもを理解する努力や自ら学びつづけることで「指導力」「援助する力」を

身につけたいと考えていたことが分かる。

## まとめ

本授業報告は、アンケートから、学生が就職前に保育者として必要とされる能力をどこまで修得したと理解しているのかをまとめたものである。学生の声をそのまま引用したことで、大学の幼稚園教諭・保育士課程の問題や学生の思いを述べることでできた。文科省が「教職実践演習」で要求する四つの項目については次のような学生の意見があったとまとめることができる。

「一．使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」について、学生は、子どもの発達段階による援助ができるよう努力することが保育者としての「使命感」や「責任感」であると考えていた。一方で子どもの多様性と個性を重視する保育を行うには、自分の力はまだ不十分だと理解していた。「教育的愛情」について、「子どもの主体性」を大事にするのと「甘やかすこと」は異なるのは分かるようであったが、保育者として子どもと関わるにはまだ不安があることが分かった。しかし、就職後に園において多くの保育者から学ぶことには前向きであった。

「二．社会性や対人関係能力に関する事項」については、自分の保育を高めるために「保育者間・他機関との連携・保護者との関係」に関わる「社会性」や「対人関係能力」を高めたいという学生の声が多かった。

「三．幼児理解や学級経営等に関する事項」については、学級経営のなかで一人一人の子どもを大事にすることを深く考える学生が多かったことが理解できた。

「四．領域・保育内容等の指導力に関する事項」に関して、学生は、子どもを理解し「子どもの主体性を引き出しつつ」カリキュラムを作り上げ、また実践の場では子どもが必要とする援助の力を持ちたいと考えていた。このような力はすぐに得られるものではないため、将来にわたり保育者としての力を伸ばすことを考える意識が高い学生が多かった。

## 〈謝辞〉

本アンケートを行った際、幼稚園教諭・保育士課程の学生さんが積極的に協力し、本報告へのアンケート結果の引用を認めていただいたことに感謝いたします。本当にありがとうございました。学生さんの一部引用箇所（ママ）とある点は筆者が記したものです。

## 「参考文献」

- 山田悠利・渡部努・平尾憲嗣「保育・教職実践演習（幼）における主体的な学びの効果②―保育内容の指導法を体得する過程に焦点をあてて―」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』（五二）、一五一―一六〇頁、二〇一九年